うさぎドロップ　そのあと二人は

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うさぎドロップ　そのあと二人は

【Ｎコード】
Ｎ６０８５Ｗ

【作者名】
キリ

【あらすじ】
うさぎは淋しいと死んでしまう。
じいさんとお別れした時のりんの泣き顔を見て、なぜだかそんな言葉を思い出していた――。

原作最終巻後の二次創作です。
アニメのみ、原作を最後まで読んでない人は読まないほうがいいです。
ネタバレあるんで。

side. A

女の子は何で出来てるの？
お砂糖、スパイス
素敵な何か
そんなもので出来てるわ

side. A

「りん、おめでとー！」
そう言って元気よく扉を開けて入ってきたのは、りんにとって遠い親戚であり、幼い頃からの親友である麗奈であった。
「麗奈、ありがとー。あっ、そのコサージュかわいいね」
いつものようにアップにした麗奈の髪には、青いバラのコサージュがつけられており、それに合わせたのだろう、薄い青色のドレスもとてもよく似合っていた。どちらも今日という特別な日のために、麗奈が母親と二人で選んで用意したものである。
「そうでしょー？　ママとおそろいなんだよねー。でも、りんの方がチョーキレーだよ」
「うーん、でもこれ、動きづらいんだよね……」
純白の特別なドレスに身を包んだりんは、そう言って照れたように笑った。
「おめでとー、鹿賀さん」
「おめでとー」
「竹内くんも内村くんもありがとー」
麗奈のあとに続いて控え室へと入ってきたのは、麗奈の彼氏であ

る竹内くんとその友達である内村くんである。二人ともスーツは着慣れていないのか、どことなくぎこちない様子であった。
「ほら、コウキくんも」
コウキの名前が出てきて、りんの視線が扉の奥へと向かう。
「……」
そこには、バツが悪そうにそっぽを向いて控え室へと入るコウキの姿があった。
「……その、おめでと」
「――うん、ありがと」
小学校に入る前から一緒にいた幼なじみで、きょうだいのように育ち、一度は好きになったことのある男の子。今は地元を離れ、遠くの大学に通っているものの、きっと来てくれるだろうと思っていた。
「あっ、コウキ、襟――」
ふわりと純白のドレスが揺れる。りんはコウキの前へと歩み寄ると、裏返ったスーツの襟元を直そうと腕を伸ばした。
「あっ――」
そっぽを向いていたコウキが、思わずりんの姿を視界に捕らえてしまう。
「……？」
伸ばした腕に落ちてきた水滴に、りんが怪訝な表情でコウキの顔を見上げると、そこにはハラハラと涙を流すコウキの姿があった。
「ちょっ、コウキ――！？」
「ふ……ぐう……」
必死で涙を堪えようとしているのは、はたから見てもわかるのだが、どうにも上手くいかないようでコウキは顔を真赤にしている。
「あー、コウキ泣いてるー！」
涙で顔をグシャグシャにしたコウキを指さしながら、麗奈がケラケラと笑った。
「ちょっ、麗奈ちゃん――」

コウキが泣くところを初めて目にした竹内くんと内村くんが、どうしたものかとあたふたする。
コウキは手の甲で必死に涙を拭うと、
「りん……きれ……キレイ……っだ」
「うん」
「おめ……おめでと」
「うん」
「……幸せに、なれよ」
「うん」

そう、今日は特別な日。
女の子なら誰もが幸せになれる日。

この日は、鹿賀りんと、彼女を育てた河地大吉の結婚式であった。

side. A（後書き）

りんちゃんペロペロ（＾ω＾）。

えー、というわけで、うさぎドロップの二次創作です。
原作を表紙買いしたとき、まさかアニメ化するとは思わなかったけどなぁ。

じんべいとか世界で一番ＮＧな恋とか娘３動物園とか好きです。

episode. 1

――どうしてこんなことになってしまったのか。

ダイキチは実家へと向かう電車の中で、そんなことを考える。

隣りには自分にとって娘のような存在である「りん」が、窓の外の流れていく景色に目を奪われていた。

当時、祖父の隠し子として現れた六歳の彼女を引き取り、育てると決めたのが三十歳のとき。

それから悪戦苦闘しつつも、周囲の人々に助けられ、なんとか今年彼女が大学に入るまで育ててくることができた。

そんな彼女とダイキチはこれから――

（結婚するって報告をしにいかにゃならんのか……）

思わずため息が漏れる。

決して、りんのことが嫌いなわけではない。彼女に気持ちを打ち明けられてから二年間、彼女をそういう風に見ることができるのかについても真剣に考えてきた。

結論として、ダイキチはりんとの結婚を選ぶ。

りんが本当は祖父の子供ではないという事実を彼女自身が知ったとき、正直ダイキチはりんとの今後の生活に翳りを感じていた。血のつながりだけが家族だとは思わないが、それではりんと自分との関係はと言うと、答えることができないでいたのだ。

自分とりんがそういう関係になることで、本当の意味で家族になることができ、りんもまたそれを望んでいるのであれば、ダイキチがそれを拒む理由はない。

とはいえ。

（母ちゃんに何て言えばいいんだ……）

世間的にみても、結構アレな問題であることはわかっている。そうそう受け入れられるものでもないだろう。わしゃわしゃと頭をか

くダイキチに、
「ダイキチ、髪の毛抜けちゃうよ？」
心配そうにりんが言った。
かきむしる手を止め、ダイキチはふと思う。
（……あのとき、りんを養子にしていれば、また違ったのかもしれないな）
りんが小学校に上がる前。苗字が違うことで何か言われたりしないようにと、りんを養子にしようとしたことがあった。そのときりんは、「ダイキチはダイキチでいい」と言ってくれたのだ。子供にとって何気ない一言だったのだろうが、それは祖父の代りとしてではなく、ダイキチをダイキチとしてそのまま受け止めてくれる言葉だった。
（思えばあのときから、ずいぶん遠くまできちまったなあ……）
電車のシートに身を預け、振動を感じながら窓の外へと視線を向ける。
時間は止まってはくれない。二人の距離や関係が変わったとしても、変わらず進み続けるのだ。
ふと、ダイキチの手に隣りに座るりんの手が触れた。
「――ダイキチ、やっぱりわたしじゃダメ？」
「……」
不安そうに震えるりんの手を、ダイキチはギュッと握り返す。
「そんなわけねーだろ。俺が、りんといることを選んだんだ」
今考えれば、りんを引き取る前はどんな生活をしていたんだろう。もう思い出すことができないほど、それが当たり前になっていて。
いつかはりんを母親に返すことも覚悟していた。だからこそ、ダイキチはりんとの間に一線を引いていたのだが――。
親代わりであって親ではない。そんなあいまいな関係だったからこそ、ダイキチ自身最終的にこうなることを受け入れられたのかもしれない。
ダイキチが笑うと、りんも笑う。

「そっか、うん。――はやく着くといいね、ダイキチの実家」
「あああああ……」
このまま時間が止まってしまえばいいのに。再び頭を抱えながら、ダイキチはそんなことを思うのだった。

◆　◇　◆　◇

「あらまー、いらっしゃい」
そう言って玄関にてダイキチたちを出迎えたのは、ダイキチの母である幸子であった。
「大学、無事受かったんですって？」
「うん、保育科のある短大で――」
廊下を歩きながら、そんな話をする。事前にダイキチから電話で大学合格の報告は済ませていたものの、実際にこうして本人の口から聞くのはやはり嬉しいものなのだろう。
そうして居間へと着くと、そこにはダイキチの父である健二が新聞に目を通していた。
「おや、おかえり」
「ただいまー」
軽く挨拶を交わし、りんと二人居間のテーブルの前に腰をおろす。しばらくして、幸子が人数分のお茶を煎れてそこに加わった。
「入学のお祝いをしないとねー」
「あー、それもなんだけど……。今日はもうひとつ報告があって」
「何よー？　りんちゃんの大学祝いよりもっと重要なことでもあるの？」
「いやー、まあ、重要っちゃあ、重要かな」
ダイキチはどう言ったものかと悩んでいたが、やがて決心したようにそれを口にする。

「その、結婚することになったから」
「誰が？」
「俺が」
「……」
静かな居間に、テレビの音がやたらと大きく響き渡る。
しばしの間固まっていた健二と幸子だが、すぐに気を取り直すと、驚きつつもしかし嬉しそうに笑みを浮かべて言った。
「いや、おめでとう。それにしても、驚いたなー」
「そうよ。ビックリしたわよ。アンタ、結婚しないものだとばかり――」
「ん、ああ――」
嬉しそうな二人を前に、ダイキチは内心複雑な思いを隠せないでいた。
「それで、おまえ相手は？　りんちゃんも知っている女性なのかい？」
「いや、知ってるっちゅーか……なあ？」
乾いた笑みを浮かべ、ダイキチはりんの顔を見る。
「うん、その……わたし、だったり……」
そう言ってソロリと腕をあげるりんに、二人の視線が向かう。
「またー、冗談言っちゃって」
そう言って笑う幸子に、ダイキチは真剣な面持ちで、
「いや、本気でりんと結婚しようと思ってる」
「……」
バチーンという強烈な音が、居間に炸裂する。
「か、母ちゃん！？　いきなり何すんだよ！」
「この、この……！」
幸子の手には、お茶を運んできたお盆が握られており、それを何度も何度もダイキチの頭へと振り下ろす。
「いた、痛いって！　ちょっ、母ちゃん、落ち着いて、落ち着けって！」

「アンタ、いくら彼女ができないからって、りんちゃんに手を出すなんて！！」
「出してねーよ！　……まだ」
「黙りなさい、この……！」
「まあまあ、お母さん、二人の話を聞いてみないと……」
なおも叩き続けようとする幸子を健二が止め、ダイキチとの間にりんが割って入る。
「ごめんなさい。違うの、わたしからダイキチに告白したの。ダイキチはそれに真剣に悩んで、応えてくれて――」
「……」
幸子は振り上げたお盆を、力なくおろすのだった。

◆　◇　◆　◇

「――結局、俺にりんを拒むことなんてできねーんだよ。だからまあ、その、ケジメをつけなきゃなーって」
「プロポーズはダイキチからだよー」
「おまえは黙ってなさいっ！」
ダイキチとりんのやりとりに、幸子は深くため息を吐く。
それから、ダイキチの顔を真っ直ぐ見据え、
「アンタはいつもそうね。大事なことを勝手に決めちゃって。どうせまた、今回も腹くくっちゃってるんでしょ？」
世間になんて思われようとも、ダイキチはりんを一生守ることを決心した。
ダイキチがりんのことを何より一番に考えてそう決めたのであれば、これ以上何も言ったとしても意味はない。
「全く、少しくらいは相談しなさい」
あきれたように鼻を鳴らし、それから彼女は当然のようにそれを

口にする。
「――それで、結婚式はいつやるの？」
幸子の言葉に、ダイキチとりんが顔を見合わせる
「……いや、それなんだけど。式はあげないでおこうかと」
それは、事前にりんと二人で話しあって決めたことだった。世間的に見ても、二人の関係が好ましいものでないことはわかっている。そうであるならば、わざわざ波風を立てる必要もないだろうとの考えであった。
「なに言ってんの、アンタ！　アンタはよくっても、りんちゃんは……」
「いいの、おばちゃん。わたしはダイキチと結婚できるだけで幸せだから」
「……りんちゃん」
「そういうことだから。あんまり大っぴらにすることでもないと思うし……」
ダイキチがそう言うと、りんもその横で頷く。しかし幸子は、
「ダメよ、二人とも」
きっぱりとそう言い切るのだった。
「結婚式はちゃんとあげなさい」
「いや、だから――」
「アンタ、りんちゃんを幸せにしたいんでしょ！　だったら、ちゃんと式はあげなさい」
ピシャリと言い放つ幸子を前に、ダイキチは何も言い返すことができなかった。
そこに、父親である健二がゆっくりと口を開く。
「お母さんの言う通りだ。おまえ、覚悟は決めたんだろ？　だったら、きちんとしなさい。ああ、それと、式の費用なら心配いらないよ。りんちゃん、大学へは奨学金で行くんだろ？　せめて結婚式くらいは、僕たちに出させてくれないかな」

ｅｐｉｓｏｄｅ．１（後書き）

ダイキチみたいな親父が欲しかったなあ。
ウチの親父、生きてんのかなあ。

side. B

男の子は何で出来てるの？
カエル、カタツムリ
小犬の尻尾
そんなこんなで出来てるさ

side. B

「すんません、日高さん。仲人役頼んじゃって」
白いタキシードに袖を通し、ダイキチは元直属の上司である日高に頭を下げた。
「いや、それはいいんだけどね。にしても、お前とあのリンちゃんがなー」
「普通に犯罪ですよねー」
日高のとなりで、同じ会社の女性である後藤が声を尖らせて言った。
「あー、あんまりいじめないでくださいよ。自覚あるんですから」
ダイキチの言葉に、後藤が小柄な身体を丸めてケラケラと笑う。
「冗談よ、冗談。別に血がつながってるわけでもないし、無理矢理手篭めにしたってわけでもないんだから」
「手篭めって……」
「でも、実際どうなのよ？　他の男にりんちゃんを渡すくらいなら自分がーっとか、ちょっとは思ったりしたわけ？」
ダイキチは少しだけ考え、
「いや、俺としてはりんが連れてきた男だったら間違いはないと思

っていましたからね。そういう気持ちはあんまり」
本当は、りんには普通に大学へ行ってもらって、普通に恋をして、普通に嫁に行って欲しかった。いつまでも側にいて欲しいという気持ちがなかったとは言わないが、そんなのは自分のわがままでしかない。本当に、そう思っていた。
「でもまあ、りんの気持ちを聞いたとき、嬉しくなかったかっていうと――」
何も知らない子供が、親に対して「好き」だの「結婚する」だの言うのとはわけが違う。親心として複雑な気持ちであったことは確かだ。それでも、心のどこかで少しだけ安堵している自分がいることに気づいてしまった。
これまでりんの感情を優先し、自分の感情は後回しにしてきたダイキチにとって、そのことに向きあうのは大変なことで――
「あっ、河地さんいたー」
「うーす」
「おめでとーございまーす」
見れば控え室の入り口に、大中小三つの人影が並んでいる。それぞれ、ダイキチの所属する出荷部隊のメンバーであった。
「おう、ありがとなー」
そう言って、ダイキチは三人の方へと向かう。
「まあ、河地くんらしいですよねー。いつでもりんちゃんの気持ちを優先というか」
「うん。でも、今回のことはさすがに悩んだだろうなー」
「りんちゃんの気持ちを知ったの、二年前らしいですからねー」
日高は苦笑して、メガネのブリッジを押し上げる。
「ホント、アイツのそういう所は尊敬するよ」

side. B（後書き）

あと二回〜三回くらいで終わりかな。
ちなみに、これを書いてる時のBGMは「RO－KYU－BU！」のキャラソンで「ともだちピンク」だったり。
おー、おー、おー、おー！

episode. 2

「お久しぶり……ですね」
コウキの母親である二谷ゆかりは、柔和な笑みを浮かべてそう言った。
「すみません、急にお呼び立てしてしまって」
「いえ、気になさらないでください。最近は仕事も減らしていて、暇を持て余していたんですよ」
場所はお互いの家から近い喫茶店。最近は、特にゆかりが再婚してからは連絡を取り合うことも少なくなり、こうして二人で顔を合わせるのは本当に久しぶりのことであった。
「実はそのー、ご報告と言うか。……俺も、近々結婚することになりまして」
言ってから、ダイキチはもうちょっと他に言いようがなかったものかと頭を抱える。
「お相手は――りんちゃん、ですか？」
ダイキチが驚いて顔を上げると、ゆかりは苦笑して、
「すみません。実は、コウキからお話は……」
「ああ、そうですか……」
お互い気まずげに沈黙する。
先に言葉を発したのは、ダイキチだった。
「やっぱり、変――ですよね」
「え？」
「いや、いいトシこいたおっさんが、ちっさい頃から育ててきた娘と……なんて」
「そんなこと！」
「いいんです。世間的に見て、おかしなことだっていうのはわかってるつもりですから。軽蔑されても仕方ないなって……」

「軽蔑だなんてそんな！　……そんなこと、しないですよ」
ゆかりはダイキチを真っ直ぐ見つめると、
「りんちゃんの気持ち、少しはわかるつもりです。私もダイキチさんのこと、好きでしたから」
初めて口にしたその言葉は、やはりもう過去のもので。
「りんちゃんは大人で、頭のいい子です。きっと大吉さんのように悩んで、苦しんで、それでも一緒にいたいと、大吉さんを好きでい続けると、決心したんだと思います」
ほんの少し、自分にも勇気があれば。どんなことがあっても、目の前の彼と一緒にいたいと、そう思えていたなら。
「少し、羨ましいです」
「……」
喫茶店のＢＧＭが、次の曲へと変わる。
ダイキチはコーヒーを一口すると、真剣な面持ちでゆかりに伝えた。
「りんのこと、必ず幸せにしますから」
「はい。ぜひそうしてあげてください」

◆　◇　◆　◇

ダイキチがゆかりと会っていた頃、りんはひとり電車に乗ってとある場所へと向かっていた。
着いた先は、りんがダイキチと暮らし始める前、ダイキチの祖父である「おじいちゃん」と暮らしていた家の近所――りんの実母である吉井正子が暮らすマンションである。
「あっ、いらっしゃい」
呼び鈴を鳴らしたりんを笑顔で出迎えたのは、漫画家である正子のチーフアシスタントとして、公私ともに彼女を支えている正子の

夫であった。
「ごめんね。今、マ～ちゃん仕事で手が離せなくって……」
「いえ、今日は渡すものがあってきただけですから」
「そっか。でも、まゆきには会っていくでしょ？」
「いいんですか？」
「もちろん。今、ちゃうど寝かしつけたとこなんだけどね」
玄関口でそんな会話をかわすと、彼はりんを中へと招き入れる。
そうして、廊下を歩いていると、ふとある部屋の前で立ち止まった。
「ほら、見てみる？」
促されてりんが覗き込んだ先には、何かに取り憑かれたように机の上の原稿用紙に向かってペンを走らせる正子の姿があった。言葉を発することさえ躊躇われるほど鬼気迫る空気の中、ペンの音だけが聞こえてくる。
（うわー、こういうの、修羅場って言うんだっけ……）
熱気が、りんの方にまで伝わってくる。何度かこの家を訪れたことはあったものの、こうして仕事をしている彼女を見るのは、りんにとって初めてのことであった。
「……」
しばらくそうやって眺めた後、りんはそっとドアを閉める。
「あれが、あ～ちゃんの仕事なんだ」
「……かっこいいですね」
「でしょ？」
単純に凄いと思った。あんなに必死で取り組むことのできる何かを、りんは持っていない。
あれが、「お母さん」があきらめきれなかった仕事。彼女にしかできない仕事なのだ。
「それじゃあ、お茶を淹れてくるからちょっと待ってて」
りんが通された部屋には、りんの妹であるまゆきが寝かしつけられていた。カーペットの上でタオルケットをかけられ、すこやかに

寝息をたてる彼女を見つめりんはぽつりと呟く。
「……お母さん、か」
さきほどの正子の姿が、脳裏をよぎる。
（やっぱり。来て欲しい、かな）
りんの視線が、まゆきから脇へと置いたカバンに移る。
すると、突然ドアが勢い良く開かれ、険しい表情の正子が部屋へと入ってきた。
「何か甘いものある？」
「――あっ」
「……」
お互い顔を合わせ、驚いた表情を浮かべる。なんと声をかけたらよいものかとりんが考えていると、先に正子が口を開いた。
「何、あんた来てたの？」
「……おじゃましてます」
相変わらずのぶっきらぼうな物言いに苦笑しつつ、りんはそう返事をした。
そうして、お互いどうするべきか逡巡していた所へ、お茶を持った正子の夫もやってくる。
「あれ、ま～ちゃん？」
「……何か甘いもの」

◆　◇　◆　◇

結局、正子を交えて三人でお茶をすることになった。
「――それで、何しに来たの？」
正子の突き放すような物言いに、彼女の夫が焦ったそぶりをするものの、何度か会う中でりんも彼女に悪気がないことはわかっていたので、にっこりと笑みを返す。

「実はこれを渡しに――」
そう言って、りんがカバンから取り出したのは一通の招待状だった。
「結婚式の……招待状？」
正子に渡したそれを、彼女の夫が覗き込む。
「わたしと、ダイキチの」
二人とも驚いた表情でりんを見つめる。ややあって、正子の夫が笑顔を浮かべ言った。
「――式、あげることにしたんだ。そっか、そっか。おめでとー。もちろん出席するよ。ねっ、あ～ちゃん。……あ～ちゃん？」
正子は無言で夫に向かって手を伸ばす。
「ペン」
「ああ、はいはい」
正子の言葉に、彼女の夫は席を立つ。ほどなくして、彼はボールペンを持って彼女たちの元へと戻ってきた。
正子はペンを受け取ると、素早く招待状の「出席」ではなく「欠席」に丸をつけて、りんへと突き返す。
「あ～ちゃんっ！？」
「あたしには、行く資格がないから」
きっとそう言うだろうということはわかっていたので、りんは何も言わずにそれを受け取る。
「それに、あたしが行くとあの人……河地さん絶対怒るし」
子供のように頬をふくらませる正子に、りんも彼女の夫も苦笑するしかないのだった。
「そうだ、たいやきもどうぞ」
差し出されたたいやきを受け取ると、一口頬張る。もっちりとした生地に、餡のほのかな甘みが口の中いっぱいに広がった。さらにもう一口とたいやきに口を近づけると、
「――りん」
正子に自分の名前を呼ばれ、思わず驚いた表情で彼女の顔を見つ

める。
「幸せにね」
子供のようなその人の、大人の笑顔。りんもそれに対し笑顔で返すと、
「ありがと。お母さん」
初めて彼女に向けて言ったその言葉は、なぜだかとても懐かしいもののように感じた。

ｅｐｉｓｏｄｅ．２（後書き）

修正を含め投稿。
次で終わりの予定。
最近ロウきゅーぶ！にはまってます。
お巡りさん、僕です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6085w/

うさぎドロップ　そのあと二人は

2011年10月22日06時22分発行